

## キェルケゴールの書簡\*1 —その1—

翻訳担当：谷塚 巖

### T107 (Brev 164)

ミカエル・ニールセン\*2宛ての書簡（日付なし、1844年5月6日推定）

親愛なる教授！

先生が誰かある人の推薦者で、私が望まれたことをかなえる裁量権をもっているとすれば、先生に対する私の裁量権は、先生の望みが命令としてかなえられることを保証してくれるでしょう。しかしながら、不運なことに、私は、まったく、推薦されたような人\*3を探してもいなければ、必要ともしていない

\*1 以下に翻訳された書簡は、2016 年秋より、榊形公也先生を世話人として、伊藤潔志先生が中心となって関西で発足したキェルケゴール読書会「キェルケゴールの日記と文書」（<https://kierkegaard.jp/> 研究会）で読み合わせたものである。キェルケゴールの書簡については、日本では、大谷長先生による、キェルケゴール協会の旧機関誌『キェルケゴール研究』第 5-24 号（1964-1992）に翻訳掲載されたものが存在する。それとの連続性を踏まえて、以下に翻訳された書簡の分類番号（略号 T）は、旧機関紙が底本としていた、ニールス・トゥルストルブ編『セーレン・キェルケゴールに関する手紙と文書』（*Breve og Aktstykker vedrørende Søren Kierkegaard*, udgivne paa Foranledning af Søren Kierkegaard Selskabet ved Niels Thulstrup, bd. I, Kbh. 1953）に従った。なお、以下の翻訳で用いられた底本は、校訂版キェルケゴール全集 *Søren Kierkegaards Skrifter* (1997-2013) である。括弧内の分類番号はそれによる。校訂版全集からの出典箇所は、慣例に従って、各書簡の末尾に、全集の略号 SKS、巻数、頁数の順に示すことにする。脚注で、校訂版の注釈書が参照される場合は、参照箇所を、略号 SKS、K28、頁数の順に示すことにする。

\*2 Michael Nielsen: 1776-1846 コペンハーゲンのいわゆる文法学校の校長を長く務め、その指導力によって、コペンハーゲンで最も水準の高い私立学校にまでその地位を引き上げたとされる。ニールセン自身は、ラテン語を教え、上級クラスでは、ギリシア語も教えた。SKS K28, 362.

\*3 ニールセンが推薦したのが誰だったのかについては、校訂版の注釈では、Johanne

状況なのです。今のところ、私には一人の老婦人がいて、私は万事につけ本当にその人に満足しています。彼女は、秋まで私の許にいます。そして秋には、私はニュートウの父祖たちの家に帰るつもりです。そこでは、彼女のような人がいらないように手筈を整えましたので、彼女の居場所すらないほどなのです。といいますのも、もしも彼女の居場所があったら、私は彼女に辞めてもらおうとは決して思わなかったでしょうから。彼女は、万事につけ、私の望みどおりにしてくれ、私の許に一年しかいなかったのですが、辞めさせられるようなら、それが私にとってほとんど良心の事柄になるだろうということを知っているからです。

先生のお手紙の内容に関することはこれくらいにして、以下では、お手紙の内容とはまったく関係がない一つの偶然について少しお話させていただきます。それは、先生から受け取るものがすべて私には嬉しいように、先生の直筆のお手紙もそうだったのですが、そのお手紙がまったく特別な仕方で、私を喜ばせてくれたという偶然です。昨日は、私の誕生日でした\*4。私は誕生日を祝うことをまったくしておりませんし、実際のところ、可能ながぎり隠しています。しかし、先生のお手紙、つまり私がこれまでに先生から受けとった唯一のお手紙が、まさにこの日に、私の手許に届くことになったということ、先生の懐かしい筆跡が、もっとも美しい私の記憶の一つを、純粋に生き生きと思い起させてくれたということ、心のこもった最後の署名が、私が昔実際に信じかつ知っていたこと、それでも常に、喜びとともに、繰り返し聞いていること、つまり激しく変化する時代も、この点では何も変化していないということを私に納得させてくれているということ、これらすべてのことを、どうして、優しい運命の働きと見なさないわけがありません。それが私に、誕生日の挨拶を贈ってくれたのです。あまりにも嬉しかったので、私はそれを自分で、いわば、強要しているかのようです！ご覧ください、ですから私は、この短いお手

---

Gjerløff という人物が推定されているが、はっきりしたことはわかっていない。ニールセンは、校長を辞任してフレデリクスベアに引越すにあたって、それまで雇っていた家政婦の一人を、キェルケゴールに紹介した。SKS K28, 363.

\*4 キェルケゴールの生誕年月日は 1813 年 5 月 5 日。1844 年にこの草稿が書かれたとされているので、キェルケゴールは、31 歳になったばかりであった。

紙に対して、そして、それが私にもたらしてくれた印象に対して、先生に感謝いたします。というのもその印象のせいで、最後に先生のお名前を拝見したのが、市民道徳学校 (Borgerdydsskolen) の校長辞任を通知する回覧\*5においてであったということを忘れてしまったからです。ところでそうされるしかなかったのでしょうか。しかし、そうだからといって、誰にでも、自分でそうした一歩を踏み出す力があるわけではありませんし、それをしなければならないことに耐える力があるわけでもありません。先生に慰めの言葉を与えようとするほどのうぬぼれ、軽率、向こう見ずを持ち合わせているような人がいるとしても、それはもちろん、私ではありません。もしも、先生がそのことを私に許してくださったとしても、私はむしろ、慰めるにはふさわしくない者でありたいと存じます。キェロがティティウスに手紙を書いたときに、キェロが理解していたのと同じような意味で\*6。「先生を慰めるのに私はもっともふさわしくありません。なぜなら、先生が困っておられるとしたら、私自身が慰めてもらう必要があるほど、私は悲しくなるからです (unus ex omnibus minime sum ad te consolandum accommodates, quod tantum ex tuis molestiis cepi doloris, ut consolatione ipse egerem.)」。

感謝と愛において  
先生のまっつき恭順者  
S. Kierkegaard  
(SKS 28, 271-272)

#### 付録：ニールセンが保護者宛に送った通知の全文訳 (SKS K28, 363-364)

新入生のほとんどが、当学校を信用していません。こうして入学者数が、特に大学への入学者数が、連続的に減少しています。何とか対処できる限りは、毎年の赤字に私は耐えてきました。しかし、今ではこれ以上どうしようもあり

\*5 学校に通う子弟の保護者宛に 1844 年 4 月 25 日に送られた文書のことを指す。回覧の全文については付録を参照。

\*6 キェルケゴールは、キェロがその友人、ルキウス・ティティウス (Lucius Titius) に宛て書いた書簡をラテン語で引用している。

ません。加えて、私は、自分の手では現状を変えられないという、私にとっては残念な確信にいたりしました。それゆえ、私は年金を願い出しました。この年金は1831年に国が私に保証してくれているもので、非常に光栄にも1400 Rdl支払われます。すなわち、私がほぼ33年間にわたって、私のすべての時間と私のすべての力とを捧げ、そして喜びや悲しみを共にした、私の愛すべき学校を、私は、7月の試験期間が過ぎてから去ることになります。といっても、私は10月1日までは学校の仕事を続け、今年の候補者を大学に入学させることはします。ここに、私が、お父様方やお母様方に、私にとっては深刻ではあっても避けることのできないこの決定と、私に示し続けてくださった信頼に対する心からの感謝の気持ちとを率直にお伝えするにあたって、私にとっての大きな慰めは、学校運営の能力と経験があり、何事にも情熱的な私よりも若い二人の方に、時代の要求に適合して出直せるように、私の後任として学校の指導を引き受けてもらうよう説得できたということです。こうして、私は、前世紀に市民道徳に鼓舞された社会の下で初めて歩みだした頃からの、さまざまな時期における本校の歩みとその活動を回顧する多くの人々が関与してくれるという点で、本校がこれまでとは違う指導と調整の下で、強力な支持を見いだすであろうというたしかな希望に、身を委ねます。この希望の中で、私は、彼らが学校にふさわしいものとなるべく努力してくれると確信しているのですが、私はその確信に学校と管理者たちを託し、さらに私自身を愛する思い出に託すことを、あえていたします。／M. Nielsen

（なお、この回覧文は校訂版キェルケゴール全集において、Holger Lundの『コペンハーゲンの市民道徳学校』から引用されている。）

**T108 (Brev 11)**

ペーター・キェルケゴール<sup>\*7</sup>宛ての書簡（日付なし、1844年5月16日あるいは17日推定）

親愛なる兄へ

同封されたものは——あなたの感謝として、さらに、お手紙、ご招待、二重のご提案に対する私の感謝として——送られたものです。ただ二重のご提案のために、私が行けなくなる可能性が実際非常に大きくなりますが。というのも、二重の提案というものは、ただちに私の想像力を働かせはじめ、想像力が働くようになると、熟考がはじまり、その熟考に個々の潤色がなされ、——さらに、こういったことがすべて生じると、私自身は（童話のなかで、ガタンガタン、ガタンガタンするひきうすのように）、北門とか西門などから、いつもの散歩に出かけるからです。

しかし、行く気にならないからというだけではありません。それどころか、——先日、実にロスキレ<sup>\*8</sup>にいて、ソーウェー<sup>\*9</sup>までの切符を買ったほどです。——というのも、ひょっとしたらそちらに行くことが私に魅力的に見えるかもしれないと思ったからです。ところが、ロスキレに着くと、とても疲れてしまい、そのためまた家に引き返して、自分のベッドに入ってしまった。ベッドに入ることを、私はもっとも素晴らしい発見の一つだと見なしています。これはまったく全世界に対して、さようなら——あるいはお休みなさいと言うことです。ストームギャーデに住んでいた一人の老資産家で保証人の話を聞いたことがあります。彼は、窓を開け、もしくは家の戸口に立って、午後のパイプをふかすことが好きでした。そこに、夜警が10時の時刻を大声で告げるの

<sup>\*7</sup> Peter Christian Kierkegaard (1805-88). キェルケゴールの長兄。1822年にコペンハーゲン大学神学部卒業。

<sup>\*8</sup> ロスキレ (Roeskilde, Roskilde) は、コペンハーゲンより西へ 30km ほど離れたところにあるデンマークの旧首都。SKS K28, 79.

<sup>\*9</sup> ソーウェー (Sorøe, Sorø) は、コペンハーゲンから 75km ほど離れたところにあるシェラン島中部の街。兄ペーターは、この街のすぐそばのペーダースボウ (Pedersborg) で教区牧師を務めていた。SKS K28, 79.

に、彼の戸口まで来てそれを告げ、それが終わると、彼はその夜警を呼び止めて、こう言ったそうです、「夜警よ、お前が告げたのは何だったのか」と。(それはこの大げさな行為の際の祝祭的な儀式なのです。というのも、彼は夜警が何回も、そして特に彼の戸口で告げるのを聞いていたので、何時なのか、とてもよく知っていたからです。)夜警は応えました。「10時でございます、長官様」。「おー、そうかね」と参事が返しました。「夜警さんよ、では、ドアを閉めるとしよう。もしも誰かが私を尋ねてきたら、その人に、私におべんちゃらでもするようにと伝えてくれたまえ」\*10。

さて、正直に言いますと、私はあなたのところに行きたかったのです。そしてとどのつまりは、私をためらわせているのは、幾分かは、それをなかなか克服できないでいる私のものぐさです。でもまた幾分かは、ソーウェーがあなたのすぐ近くにあり過ぎて、田舎にいても本当に鳥のように自由であるという感じがなかなかしないと思うからです。そうでなければ、あなたのところに出かけることは、私にとって、非常に、楽しみでありえたでしょう。特にポールに会いたくて仕方ありません。私の叔父としての人生における立場は、私にとっては大好きな務めであり、また私は、甥たち\*11から、よく抱擁されているのです。ポールにはよろしくと伝えてください。彼にセーレンという叔父がいることを、まったく知らないままにさせないでください。私自身が、彼と初めて一対一で話をするようにできれば、お互いの面識がすぐに深まることになればと願っています\*12。

\* 10 コペンハーゲンやそのほかの街では、夜警が組織されていた。彼らは街灯をつけて回り、街の安全と秩序を維持し、路上での軽犯罪を取り締り、火災の警報を鳴らした。さらに見回りの際には、時刻を告げ、毎時間決まった夜警の歌を歌ったという。コペンハーゲンでは、1683年に夜警団が設立された。しかし、キェルケゴールの時代には、「大声で叫ぶ」夜警は、むしろ市民たちの夜の安眠の妨げになっているとして頻繁に批判の対象となり、1862年に解体された。SKS K28, 79.

\* 11 キェルケゴールの長姉ニコリーヌ (Nicoline) がその夫 J. C. ルンとの間に設けた三人の息子 (Henrik Sigvard Lund, Michael Frederik Christian Lund, Carl Ferdinand Lund) と、同じく長姉ペトゥリア (Petrea) がその夫 H.F. ルンとの間に設けた三人の息子 (Vilhelm Nicolai Lund, Peter Christian Lund, Peter Severin Lund) のことを指している。SKS K28, 80.

\* 12 ポールが生まれたのは、1842年3月27日 (~1915年)。したがって、キェルケゴールがこの手紙を書いたとき、ポールはまだ2歳であった。

私の精神は、ますます増していく馬力で働いています。体がこれに持ちこたえられるかどうかは、神がご存じでしょう。というのも、私は自分を喩えるとすれば、その構造と比較してあまりにも馬力のある蒸気船しか思いつかないからです。他方で、私は自分の守護神\*<sup>13</sup>に従わなければなりません。私は見ず知らずの交際にはどんなものにもうまく耐え忍ぶことができません。そしてこの点に関しては、私は、あなたが私にしたいようにさせてくれれば、それにはうまく耐え忍ぶことができるでしょう。これは礼儀というものだと思います。それは、私を招待するときには、行くか行かないかが私の自由であると明記された但し書きをつけるのが、礼儀にかなっているのとまったく同様です。私を招待しようとすることは、友人であることの表現だと思います。招待状を非常に面白おかしく書くことは、私のような非・人間との友情関係の人間的な表現であると思います。もしも、人間とは社会的動物であるというアリストテレスの考えが間違っていなければ。

これをもって、この手紙を閉じます。

イエッテにどうぞよろしく  
それにポールとあなた自身にも  
隠棲せる誠実性において、あなたに完全に恭順なる、あなたの弟  
S. Kierkegaard  
(SKS 28, 27-29)

### T109 (Brev 234)

イブセン牧師宛の書簡（日付なし、1844年7月推定）

親愛なるイブセン牧師\*<sup>14</sup>！

先生の家に、そして、とりわけ、先生自身に降りかかったような悲しい出来

---

\*<sup>13</sup> Genius. ラテン語で守護神を意味する。

\*<sup>14</sup> Peter Diderik Ibsen (1793-1855) キェルケゴールは若い頃より、イブセン牧師を慕っていた。SKS K28, 477.

事<sup>\*15</sup>が、私の哀悼の気持ちをおごそかにお伝えするのではなく、むしろ、私の哀悼の気持ちを少し表現するというを何らかの仕方で、私に強制したという印象を、もしも先生がお感じるようなことになれば、それは私自身の気持ちを害するものとなることでしょう。というのも、ある意味において、私はこのことを、私自身のためにしているからです。また、私の考えでは、実際それが一番いい言い回しでしょうが、ありふれた言葉や決まり文句で悲しんでいる人を煩わせようとするやかましい哀悼の言葉よりもひどいものは何もあります。ある人が他の人を完全に理解するというようなことは、一般的には断じてありえません。そして、このことは、特に悲しみについてあてはまります。というのも、根本において、悲嘆にくれている人は誰でも、まさにその人が特に悲しみの対象とよび、葬儀屋や雇われの泣き屋では見つけるのが難しいものを、もっているからです。ましてや、すでに浮き沈みの激しかったお二人の波乱の結婚生活に死が割って入ってくるところでは、なおさらそうです<sup>1</sup>。今ありきたりの決まり文句をもって来るとすれば、この場合にはそれは何と愚かなことでしょうか。それは、あたかも、経験してきたこと、そして共に生活してきたことのすべて (summa summarum) が、共に食べ、飲み、眠ってきた空虚な29年間もしくは30年間であり、そして消え去らない悲しみや思いで深い記憶の数々のすべて (summa summarum) が、あたかも、慰める者がすぐに準備できる抽象的で空虚な事実であるかのようなものです。それに対し、悲しむ者は、最初に少しずつ悲痛を発見する旅を始め、その悲痛の詳細はその人自身にしか分からないのであり、その旅からある日疲れて戻り、そしてまた次の日には物憂げにその旅を始め、しかしまた憂鬱のうちで慰められ、その人にとってその旅がますます愛おしくなっていくのです。

そうなのです。だからこそ私は、あらゆるおしゃべりから距離を置いているのです。なぜなら、たとえ私が通常ときには何か思慮深いことをうまく言うことがあるとしても、私が話しはじめるやいなや、何について話せばよいかかわらないので、おしゃべりをしたにちがいがなかったこと、そしてそれゆえに、空

\* 15 イブセンの妻 (Dorothea Elisabeth Ibsen: 1786-1844) が 1844 年 7 月 8 日に死去したことを指す。



中に向けて言葉を振り回していたにちがいがなかったこと、つまり、誰か他の人がそのもっとも親密な関係の中で体験していることを、そのようにして軽率にも思い描くことができるという詩人の空想の中で言葉を振り回していたにちがいがなかったことが、私にはわかっているからです。とはいえ、私が何について話せるかはわかっています。というのも、奥様についての思い出は、私にとって今でも生き生きとしておりますし、私はまた言うまでもなく奥様を知っておりますし、短い間とはいえ、先生の家でお会いしたこともあるからです。そして先生の家では、とても居心地のよい時間を過ごさせていただきました。先生の家で、私はいつも親切なもてなしを受けましたし、奥様が全ての人を歓迎してくれたもてなしも受けました。懇意にしてもらいましたし、私の奇妙なお願いやおかしな態度も受け入れていただきました。先生の家は、私がそれを当てにした、そして今も当てにしている数少ない場所の一つだったのです。

最後にあった出来事について語るのをお許しください。愚か者であれば、こう言うかもしれません。悲しみに打ち沈んでいる人がその悲しみをまさに忘れてしまっているかも知れないのに、それを思い起こさせるべきではないと。また、その次の日に、その悲しみに言及することに対しては氣遣うべきであると。

<sup>1</sup> 浮き沈みの激しかった波乱の生活

(この後の文章は欠けている)

(SKS 28, 355-356)

**T110 (Brev 123)**

王立図書館宛の書簡（1844年10月31日付）

ここに署名した者は、ヘンリック・シグヴァ・ルン<sup>\*16</sup>という学生が、王立図書館より借りる書籍について、これをもって保証いたします<sup>\*17</sup>。

S. Kierkegaard.

ニュートゥ2番地の所有者

1844年10月31日 コペンハーゲン

(SKS 28, 206)

**T111 (Brev 209)**

J.F. ギョヴァズ宛の書簡（日付なし、1844年8月頃推定）

親愛なるギョヴァズ<sup>\*18</sup>！

今、ご都合はいかがですか？ 気が進みませんか？ ご面倒をおかけしますが？ 他にもどう言ったらいいのでしょうか—— 危険と差し迫った必要が目の前に迫っているのです。つまり、私が原稿を送ってもう数日になるのです<sup>\*19</sup>。それなのに、午前中の数時間か、午後の4時から6時まで時間を取れないという

\* 16 当時、医学生であった、キェルケゴールの甥の一人（Henrik Sigvard Lund: 1825-89）。脚注 11 も参照。SKS K28, 295.

\* 17 学生などが王立図書館から本を借るときは、役人や土地所有者を保証人として立てることが慣習となっていた。SKS K28, 295.

\* 18 キェルケゴールの親友の一人（Jens Finsteen Giødwad: 1811-91）。弁護士。ジャーナリストとしても活動し、『コペンハーゲン・ポスト』や『祖国』などの各紙の編集委員を歴任。『あれか-これか』の校閲も行ない、キェルケゴールの著述活動の前期にあたる期間（1843-1845）には、著作の印刷や販売にあたって、キェルケゴールの代理人を務めた。SKS K28, 443.

\* 19 『四つの建德的談話』の原稿を、1844年8月9日に印刷所に送ったことを指して言っている。この著作は、1844年8月31日に出版された。SKS K28, 443-444. キェルケゴールの術語“Tale”を「談話」と訳し、“opbyggelig”を「建德的」と訳すことに関しては、大谷長「キェルケゴールの著作表題の持つ問題性（Ⅲ）」（『キェルケゴール研究』第17号、41-42頁を参照）。

ことでしょうか。いずれにせよ、どうか、私のところに寄ってください。全部でたった四つの建徳的談話に過ぎないのです。それに、暑かろうが、どんな天気であろうが、誰か他の人の前に座って声を出して読み上げるという考えには、嫌気がさすのです。それはそうと、レヴィン\*<sup>20</sup>が居合わせることになるでしょう。彼はついこの前私に旅行から帰ってきたことなどを知らせてくれました。しかし、君が今すぐに来ようが来まいが、私たちの間には、一つ清算しなければならぬことがありますよね。といってもそれはいつも私が喜んで未解決のままにしていることだけではありません。というのも、それは私が好んでしていることだからです。そうではなくて、清算しなければならぬことは、君がよく知っているように、私が何を考えているかということです。この前、私がそれを解決しようとしたときなど、君ははぐらかして私にとりよめないおしゃべりをしました。そして次に会ったときには、私はそのことを忘れていたのですが、今回ははっきりと思い出したのです。

(SKS 28, 331-332)

### T112 (Brev 35)

ヘンリエッテ・キェルケゴール宛の書簡（日付なし、1844年8月頃推定）

親愛なるお義姉さん\*<sup>21</sup>！

スクリーブのもっともすぐれた脚本の一つに、ご記憶とは思いますが、シャルルという名前の人物（天才というには問題があると思いますが、無限に喜劇

\*<sup>20</sup> レヴィン (Israel Salomon Levin: 1810-83) は、1844 年から 51 年までの間、キェルケゴールの秘書を務めていた。文献学者であり、著述家でもあった。デンマークの各紙への執筆や編集だけでなく、デンマーク語の文法書も出版。SKS K28, 444. なお、レヴィンが生涯にわたって集めたデンマーク語の語彙は、のちに編纂されたデンマーク語大辞典の基礎となった。Joakim Garf, *Søren Kierkegaard: a biography*, trans. by Bruce H. Kirmmse, Princeton University Press, 2005, pp. 288-292. (Joakim Garf, SAK. *Søren Kierkegaard, En biografi*, G.E.C. Gads Forlag, 2000.)

\*<sup>21</sup> キェルケゴールの長兄ペーターの妻ソフィ・ヘンリエッテ・キェルケゴール (Sohie Henriette Kierkegaard: 1809-81)。イエッテが通称。

的な人物)が登場します。彼は、叔父が自分の借金を返済してくれたときに、とても感激して叫びました。「私は、すぐさま、自分自身にこう言った。叔父がいるか、あるいは、いないかのどちらかだ、と」\*22。この言葉を、私は自分の考察の土台にしようと思います。さて、親愛なるイエッテ、もしも、あなたに考察者となってもらえれば、あなたは、きっと、こう考えるでしょう。「義理の弟がいるか、あるいは、いないかのどちらかだわ。でも、もしも義理の弟がいるのなら、なぜ、一度も彼と会わないのでしょうか」と。この点では、あなたは実際まったく正しいのですが、あなたの場合は、結論を導くという観点では、シャルルの場合よりも、比較にならないほど *sans comparaison*、はるかに困難です。もしも、私が考察を始めるとすれば、私はこう考えるでしょう。「義理の姉がいるか、あるいは、いなかのどちらかだ。しかし、一度も会わない義理の姉がいるということは、何を意味しているのだろうか」と。この点では、私も実際まったく正しいのですが、私の場合は、あなたの場合よりはるかに容易です。つまり、ペーターが私に示してくれた手紙から、私への挨拶と招待を見て取ったのですが、それを見てすぐに、私は思わず、あの奇妙な言葉を発したのです！

想像してみてください！それはいまでも非常に奇妙なのです。というのも、あなたがコペンハーゲンにいたときは、私たちはなるほどそれほど頻繁には会わなかったのですが、それでも、ときおりあなたから手紙をいただいていたからです\*23。そして、それらの手紙にもまた、奇妙な脈略がありました。それらはますます短くなっていったのですが、しかしそれは、あなたが私に対してま

\* 22 フランスの脚本家、スクリーブ (Augustin Eugène Scribe: 1791-1861) の喜劇『初恋』からの引用。『あれか - これか』の第1部に所収された評論「初恋」で、この台詞について論じられている。スクリーブの『初恋』は脚本家のハイベア (Johan Ludvig Heiberg: 1791-1860) によってデンマーク語に訳され、コペンハーゲン王立劇場で、1831年から1845年の間に61回上演された。スクリーブの作品は、当時の王立劇場で人気ももっとも高かった。SKS K28, 116.

\* 23 イエッテがコペンハーゲンに住んでいたのは、1841年7月から1843年5月までの間。つまり、キェルケゴールの兄ペーターと結婚し、ニュートゥの2番地に住むことになった。しかし、ペーターが、教区牧師としてペーダースボゥに移ることになり、イエッテも、少し遅れてコペンハーゲンを離れることになった。SKS K28, 116f.

ますます冷たくなったという兆候ではなく、むしろ反対に、あなたが私に対して一層の信頼を寄せてくれるようになったという兆候だったからです。そういうわけで、あの日々以来、あなたからまったくお便りがなくなったというこの状況は、あなたに義理の弟がいるという考えがあなたにとって、ますます疎遠になったということではなく、むしろあなたにとって、より自然なものになったということの兆候としておきましょう。正直に言いますと、義理の姉がいるということは、私にとってはそのようなのです。あなたがコペンハーゲンにいたときは、あなたを訪ねに行くことはとても容易なことでした。そして、たとえそのことを私が思いついたとしても——ただし、私はそうしなかったわけですが——次の瞬間にはよい心地がしなかったでしょう。そして私は、そのような思いつきから急いで離れざるをえなかったでしょう。それに対し今は、長い道のりが<sup>\*24</sup>、ある意味、思いをとどまらせてくれます。こうして、ときおりあなたについての思いに注意を向けるということがまったく理にかなっているのです。特に孤独な散歩に出かけ、そこでまさに牧歌的なものの印象が私に非常に美しく立ち現れたときには。結局、この長い道のりが、新しい困難となったのかもしれませんが。私の子どものときによくあったことですが、私はフレデリクスベアまで出かける許可を父からもらず、その代わりに、父に手をつながれて床を上がったたり下ったりしました——フレデリクスベアまで<sup>\*25</sup>。そして、この「フレデリクスベアまで」が、常に私の人生の座右の銘であり、そして座右の銘となりました。

あなたに手紙を書いていて、私に思い浮かんだことは、だいたい以上のとおりです。たとえ行くための素早さ (Skyndsomhed) が私になくても、私が遠

---

\* 24 コペンハーゲンからソーウェーまでは約 75km の道のりがあり、ペーダースボウまではそこから数 km 先に行かなければならなかった。SKS K28, 117. なお、脚注 9 も参照。

\* 25 幼少期の同じような体験は、未完の自伝的著作『ヨハネス・クリマクス、あるいは、すべてのことは疑われるべし』でも語られている。SKS 15, 18. この個所では、フレデリクスベアについては言及されていないが、外出が許されなかった代わりに、父に手をつながれ、ヨハネスの行きたかった場所を想像しながら床を上がったたり下ったりしたこと、その際、父の生き生きとした描写によって、あたかも一日中旅行をしたかのような疲れを感じたことなどが述べられている。

く離れたままでいるかぎり、私には感謝の気持ち (Skjønksomhed) があります。感謝の気持ちをもって、あなたからのあらゆる知らせ、あらゆる挨拶、あらゆる招待を受け取ります。感謝の気持ちをもって、私はこのように考えています。私たち二人は、キェルケゴールという名前がすぐに死に絶えることにはならないという点で、意見が一致していると——たとえ私たちの努力が非常にちがっているとしても——。ああ！私は、あなたの努力が私の努力よりもはるかに確実であることを認めます。

この手紙は何一つ要求してはいませんし、ましてや、返事はまったく要求していません。

ペーターとポールによろしく伝えてください (ヨーロッパのどこかに、ペーターとポールの港と呼ばれるある港が存在します。それもまた、ペータースポウと呼べるかもしれませんね\*<sup>26</sup>。どうぞ自愛ください。何よりも、夏休みを、体力を回復するために使ってください。もしも、ペーターをロスキレまで連れて行くことができたということが、あなた自身うれしかったのであれば、あなたがそうできたことが、私にとっても実際とてうれしかったということをご確信してください。

あなたの

S. Kierkegaard

(SKS 28, 58-59)

---

\*<sup>26</sup> ピョートル大帝が築いたロシアの港湾都市ペテルブルクのことを指す。キェルケゴールは、ここで言葉遊びをしている。SKS K28, 117. つまり、「ペーターのポール」(父と息子の関係)ということ、「ペータースポウ」(Petersborg)にかけて言っているのである。